

第6章

インド農村における地域社会の仕組みと組織的行動

—南インド・タミルナードゥでの調査から—

佐藤 慶子

要約:

本研究は、南インド・タミルナードゥ州南部の農村にみられる組織と組織的行動に焦点をあて、農村社会における近年の変化を実証的に明らかにする。まず農村部における地方行政制度を概観し、各レベルにみられる公的・私的な組織を識別して、末端の自然村における住民の集合行為との関連を調べた。その結果、公的な組織であるグラム・パンチャヤートでは、様々な階層の代表が集い民意の反映を通じて政府の開発プロジェクトを導入するが、私的な組織であるカースト・パンチャヤートでは、世襲の長老を含む共同相続団により秩序の維持や祭りの開催が自主財源によって排他的に行われていることがわかった。次に伝統的に行われてきた村祭りや近年の開発政策で導入されたマイクロクレジット (SHG) に着目した。すると、離村により農村社会の構成員が変化中、旧アウトカースト層の経済的台頭の有無がカースト間の協調行動に変化を及ぼしていることが明らかになった。

キーワード:

インド 地方行政 グラム・パンチャヤート 祭り SHG カースト アウトカースト

はじめに

インドでは連邦制議会民主主義体制の下、各州が独立した政治体制を採用している。地方行政に関しては、1992年に施行された第73次改正憲法により、全国一律の「三層構造 (Three-tier System)」による *Panchayat Raj*¹ と呼ばれる自治体制を確立した。従来か

¹ もともとは英領期に導入されたものである。その直後のカーストと村落社会の変遷は、Tanabe [2005] を参照。

らある「県 - 開発ブロック - 村」²の最末端に位置する村 (=グラム・パンチャヤート) で選挙による民主的な代表を選出させて、政府の意向を地方行政の末端まで及ぼし、中央集権化を進めるものである。一方で、村のなかにあつて独立後も連綿と続いてきた長老を中心とするカーストによる自治機能を「インフォーマルな存在」と位置づけ、弱体化させてきた。

今日のインド農村では、グラム・パンチャヤートを中心とする地方行政体が開発政策の推進を担うが、場所によっては「私的なパンチャヤート」と呼ばれるカースト・パンチャヤート (カースト毎にある自治組織) による活動が依然としてさかんに行われている。なかには自主財源を伴って活動しているものもあり、その財政規模もグラム・パンチャヤートと比較しても決して小さくはなく、注目に値すると言えよう。もしこうしたカースト・パンチャヤートの存在と各種開発プロジェクトとの因果関係が明らかになれば、今後外部機関が何らかの開発援助プログラムを策定・実施する際には、大いに参考となることが予想される。

本研究の目的は、南インド・タミルナドゥ州マドライ県の農村部でのフィールド・ワークを通して得られたデータを元に、各村における集合行為の実施主体としての組織として挙げられる、グラム・パンチャヤートおよびカースト・パンチャヤートの事例を紹介し、なかでも開発プロジェクトとしてのマイクロクレジットの一種であるセルフ・ヘルプ・グループ (自助努力による貯蓄グループ, **Self Help Group =SHG**と略)³活動や村祭りの開催にみられる集合行為が、グラム・パンチャヤートおよびカースト・パンチャヤートとの介在の有無により、如何に形成されているかにつき述べる。くわえて、そこから今日のインド農村における集合行為に関する何らかの知見を引き出し、今後の開発政策に資することを試みるものである。ちなみに本研究は2年がかりで行う。1年目は調査村における事例の確認であり、2年目は再調査による各村の類型化および開発政策に資する教訓の提示である。本稿はその中間報告であるため、調査村の事例の記述に留める。

本稿の構成は、以下のとおり。第1節では、タミルナドゥ州の地方行政システムを概観し、農村部において重要な機能を果たしているグラム・パンチャヤートおよびカースト・パンチャヤートの構造を明らかにして、各レベルにある徴税システムにつき述べる。第2節では、調査方法および調査地の地理や離村の現状、カースト別の住民、調査地域で行われる祭りの種類や、SHG に代表されるマイクロクレジット活動など、農村部で顕著に見られる集合行動の概略を記す。第3節では、用水路灌漑農業地域および溜池灌漑農業地域にある調査村の概略を記す。最後に、本稿のまとめと今後の課題を整理する。

² それぞれの段階の行政区分は、District (Panchayat) – Block (Panchayat) – Village (Panchayat)である。

³ SHG については須田[2006]を参照。また調査地域での SHG の実態については Fujita and Sato[2011]を参照。

第1節 タミルナードゥ州における地方行政システムの概略

1. タミルナードゥ州の地方行政システムの概略

タミルナードゥ州の地方行政システムは前述の「三層構造」に変わらないが、ブロックレベルでは、郡(=Taluk)と表現されて、都市部(Towns)⁴と農村部(Villages)が混在しており、それぞれに異なる行政制度が敷かれている。例えば、マドライ「県」には7つの「郡」があるが、各「郡」には複数の都市(Town Panchayat)と農村(Panchayat Union)が分かれて存在している(表1参照)。本稿では、農村における地方行政システムを取り上げて考察する。

表1 マドライ県の各郡における都市と農村の数

郡の名称	都市(TP)の数	農村(PU)の数
Melur	2	2
Madurai North	8	2
Vadipatti	4	2
Usilampatti	1	2
Peraiyur	3	2
Thirumangalam	1	2
Madurai South	6	1
計	25	13

(出所) GOI[2001]

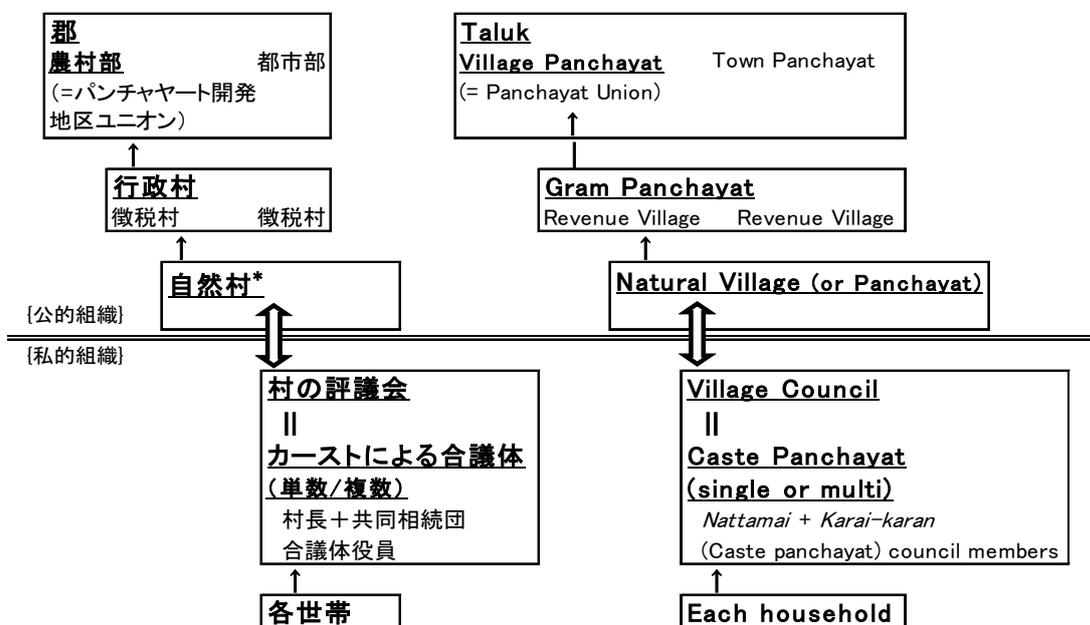
(注) TP とは Town Panchayat、PU とは Panchayat Union のこと。

⁴ Census of India 2001 によると、「都市(Urban Area)」とは、都市機構(Civic Administrative Authority of the Towns)が定めた次のいずれかの法人格(Civic Status)を有する自治体(Municipal Corporation, Municipalities, Town Panchayat, Census Town)か、または、次の条件をすべて満たすもの、とある(1. 人口5千人以上, 2. 男性就業者人口の75%以上が非農業職, 3. 1平方キロあたり人口が400人以上)。しかしインドでは、一般的に法律と実際の運用には乖離が見られる。本稿では都市部における地方行政システムの記述は割愛した。

2. 農村における地方行政システム

前述の「三層システム」による県以下の地方行政システムには、「郡」－「(行政)村」があるが、それぞれのレベルでは「Panchayat Union^{5,6}」－「Gram Panchayat」と呼ばれる行政単位があり、そこでの決定事項は議員により末端の自然村へと伝達されて、住民に影響を及ぼす(図1参照)。また行政村(=グラム・パンチャヤート)の書記官(クラークと呼ばれる)は、グラム・サバ(グラム・パンチャヤートの集会)の議事録を作成して上掲することで、パンチャヤート・ユニオンが草の根レベルの意向を吸い上げやすくする。

図1 タミルナードゥ州農村部にみられる組織体



(出所) 筆者作成

(注) * 徴税村に含まれていない自然村もあるが、その場合は地方行政のもたらす各種の恩恵を受けることが出来ない。筆者の調査村は、ヒンズー以外の他カースト(クリスチャンやムスリムなど)の居住が皆無であった為、本稿ではヒンズーカーストのみを取り上げた。

⁵ Census of India 1991 以降では、郡を構成する農村をあらわす単位として、「CD (=Community Development) block」という表現が一律に使用されている。これは、タミルナードゥ州における「Panchayat Union (PU)」と同じで、1952年に導入された Community Development (CD) Programme の名残である。

⁶ Panchayat Union のトップである行政職名はタミル語で *Tashidar* である。

一般的に1つの行政村（グラム・パンチャヤート，GPと略）は，複数のレベニュー・ビレッジ（徴税村）から構成されており，1つの徴税村にはさらに複数の自然村（およびコロニー⁷）が含まれている。また自然村⁸には一般に複数の民族が居住し，そのほとんどはヒンズー教徒で，うち主要なカーストのそれぞれが「カースト・パンチャヤート」⁹と呼ばれる合議体を，ひいては1つ以上の合議体で構成される村の評議会を形成する（図1参照）。

以下，グラム・パンチャヤートとカースト・パンチャヤートにつき順に記す。

3. グラム・パンチャヤート

グラム・パンチャヤートは，人口1,000未満～30,000のものまであって地域差が大きく，手押しポンプやOver head tankと呼ばれる貯水槽を含む飲料水の供給，村の家屋が集住する一帯での街灯の設置や側溝の清掃，近年では連邦政府による農村部における雇用創出プログラムであるMahatma Gandhi National Rural Employment Guarantee Scheme (MGNREGS)の実施¹⁰や，Public Distributions System (PDS)と呼ばれる食料品ほかの配給制度¹¹の施行がある。

行政村であるグラム・パンチャヤートでは，行政村長であるプレジデントや議員の選出に際し，州の選挙管理委員会による監視体制のもと，選挙人名簿に登録された成人男女が参加して代表を選出する。グラム・パンチャヤートのメンバーには，プレジデントや副プレジデントの他，女性議員枠やSC（かつてのアウトカースト，表7参照）出身者議員枠が設けられており，各村の代表である議員が上層カーストに偏って選出されることのないように，また議会には出来るだけ多様な階層から民意が反映されるようにと配慮された仕組みになっている。そして，政府による様々な開発プログラムの導入は，議会による了承を経て行われる形となっている。

では，実際にグラム・パンチャヤート・プレジデントとして選出されるのはどのような人物なのか。具体例を挙げると，筆者の調査村のあるマドライ県南部ティルマンガラム郡

⁷ Colony とは，政府が住居を整備し，希望する入居者に提供した集落であるが，なかにはアウトカーストとされてきたSCやSTカースト（本稿P.16，表7参照）に政府が土地と住居をあてがい，数十世帯のSCまたはSTだけの集落もみられる（本稿注16も参照）。

⁸ タミル語ではウールと言うが，パンチャヤートでも通じる。

⁹ タミル語で，カッター・パンチャヤートと言う。

¹⁰ 農村住民ひとりあたり年間100日の雇用を男女一律賃金で保障するスキーム。例えば，新しい生活用溜池の建設，などがある。

¹¹ 世帯収入別にランク付けされたカードが支給され，最貧困世帯と認定されると，1カ月に35キロまでのコメを1キロあたり1ルピー（約1.7円、2012年1月現在）で購入できる。配給対象品には，豆やケロシンなどもある。村だけではなく町でもPDS用食料・物資の販売所が設置され，定期的な配給市が開かれている。

のソーダルパッティ行政村では、2006年から2011年までの1期プレジデントを勤めた人物は小学校5年生終了の学歴だが、俳優を思わせるような風貌を備えている¹²。また同じところで、過去に二回プレジデントに選出された別の人物は、村はずれにある小さな雑貨店（兼チャイ屋）のオーナーで、清貧だが正義感にあふれた風情を漂わせ、いまだに「村のことなら彼に聞け」と指名されて、いつも彼を慕う取り巻きの農民に囲まれて、世間話に耳を傾けている。

グラム・パンチャヤートが、複数の自然村から成る行政村であるのに対し、カースト・パンチャヤートは、1つの自然村のなかのカースト別のパンチャヤート（＝合議体）である。

4. カースト・パンチャヤート

カースト・パンチャヤート（＝合議体）とは、後述のシングル・カースト村とマルチ・カースト村ではその様相がやや異なるが、おおよそ次のことが共通している。

まず、ナッターマイと呼ばれる世襲のリーダー格の家の家長と、ナッターマイを含むカライカランと呼ばれる終身の4人の共同相続団¹³、そしてカライカランを含み全部で6～8人ほどの合議体のメンバー（＝カウンスル・メンバー）を中心として、同じカーストの成人男子のみが参加できる「カースト・パンチャヤート」が形成されている。ナッターマイやカライカランが世襲または終身制であるのに対し、カウンスル・メンバーは仲間内の話し合いで数年に一度選出される。カウンスル・メンバーは、ナッターマイやカライカランを補佐しつつ、「ご意見番」としてカースト・パンチャヤートの議論をリードしたり、コモン・ファンド（後述）の管理を行う。ここで注意したいのは、カースト・パンチャヤートは決して自由な議論の場ではない、ということである。皆の話し合いで物事の白黒を決めるのではなく、村人が信頼を寄せる（または、寄せざるを得ない）「ご意見番」としてのカウンスル・メンバーにお伺いをたてて、その意見を尊重する形で、幕引けとなる。持ち込まれる話し合いは、1. 結婚に関する規則の遵守、2. 家庭内の諍い・揉め事に関する裁定、3. 他人の家畜が農地へ侵入し作物をあらしたケースなどに対する罰則による裁定、4. 遺産相続に関する相談事など、が共通している。毎月数回ほど、村の広場で夜に行われているが、特に農作業に関する揉め事の発生しやすい12月前後は、頻繁に開催される。場合によっては、カースト・パンチャヤートによる裁判の結果、罰金が科されることもあるが¹⁴、その際の課徴金は、カースト・パンチャヤートで管理するコモン・ファンドへの歳入とし

¹² 実は、彼の伯母が以前にパンチャヤートのプレジデントを務めていた経緯があることとも関係している可能性がある。

¹³ *Karai-karan*に関する説明および略語は中村[1984]を参考にした。佐藤[2008]も参照。

¹⁴ 他人の家で飼われている家畜が畑の作物を荒らしたなど。

て組み込まれる仕組みである。

次にシングル・カースト村とマルチ・カースト村におけるカースト・パンチャヤートの違いを記す。まずシングル・カースト村とは、中層から上層のカーストが居住世帯の大半（8割強など）を占めており、残りは下層のサービス・カーストや農業労働カーストが共に暮らすケースである^{15,16}。シングル・カースト村では、多数派を占めるカーストが率先して「合議体」を形成し、カウンスル・メンバーも基本的に多数派のカーストで占められるが、なかにはメンバーの推薦で他カーストの者が加わることもある¹⁷。その際、少数派のカーストで居住世帯数が少ないと、自分たちの合議体は有しておらず、多数派の合議体に出席し発言することも無いが、多数派の合議体での決定事項には従って暮らしている¹⁸。

マルチ・カースト村の場合、複数のカーストが1つの自然村に共存し、うち複数の中層から上層のカーストで、居住世帯比率が切迫しているケースである。この場合は、複数のカースト・パンチャヤート（＝合議体）が集まって村の評議会を形成しており、各カーストの代表者が意見を持ち寄る場となっている。とは言え、評議会で各カーストが同等の発言権を持つわけではなく、下層カーストによる合議体は発言力が比較的弱い^{19,20}。

5. 農村における徴税システム：公的税と私的税

これまでの文献歩やフィールド調査から、タミルナドゥ州農村部には公的な徴税システムのみならず私的な徴税制度も存在することがわかっている（表2参照）。以下、藤田・佐藤[2009]を基に、マドライ県南部ティルマンガラム郡ソーダルパッティ行政村にみられる徴税システムに則して述べる。

¹⁵ カーストについては本稿 P.15-16, 表7を参照。

¹⁶ SCなどの下層カーストだけで構成される村（コロニー等）もある（本稿注7参照）。

¹⁷ 筆者が3年間調査したソーダルパッティ行政村（後述、本稿第3節2.⑧）にあるシディレディパッティ（自然）村には、レディヤールによるカースト・パンチャヤートがあるが、そのカウンスル・メンバーにナイドゥの者が選ばれていた。村人によれば、彼は経済的な成功を収めており、学歴もある、という理由であった。Ananth et al [2007]も参照。

¹⁸ 後述のバライヤパッティ村を参照（本稿第3節2.⑧）。

¹⁹ とりわけ、元来土地を所有しないサービス・カーストや、農業労働カーストは、社会経済的な基盤が弱く、したがって村での発言権も少ない。土地所有と階層との関係は、本稿第3節以降およびYanagisawa [1996]を参照。

²⁰ 後述のバデュガパッティ村を参照（本稿第3節1.⑤）。

表2 タミルナードゥ州農村部における徴税の種類

組織体の種類		税金の種類(徴税請負人)		
公的	私的	国税	地方税	私的税
		農地税	家屋税、水道税、 専門職税	物品販売税
グラム・パンチャヤート(行政村)			(GP Clerk)	
レベニュービレッジ(徴税村)		(VAO + Talayari)		
パンチャヤート(自然村)	村の評議会			(Tandamai)

(出所) 筆者作成。

(注) VAOとはVillage Administrative officerのこと。Gram Panchayat Clerkは行政村の書記官(公務員)のこと。タンダマイ(タミル語)とは村のカースト・パンチャヤートの下に位置づけられ、村内で行われる物品の販売に徴税人が課税し、その収益が村のコモン・ファンドの一部となるもので、マゲマイ(テルグ語)に同じ(本稿P.10を参照)。また、ここで言う「自然村」は、徴税村の一部として、行政村の中に取り込まれているものである。

まず国税である農地税は、Village Administrative Officer (=VAO)と呼ばれる公務員が、Talayariと呼ばれる助手(常勤公務員)を使い、各徴税村に登録された地主(タミル語でパッタダール)から集める。それらの税収は、VAOから県徴税官(District Collector)を経て連邦政府(のRevenue Department)に上納される仕組みであり、マドラス・プレジデンスー²¹と呼ばれた英領期の統治システムの名残である。

農地は徴税目的で、水利用の違いにより次の3つに分けられる。溜池からの灌漑水を水路で引く水田(nañcai)、天水に依存する畑(puñcai)、そして灌漑水を畑に使った場合(puñcai with tank irrigation)、である(表3参照)。徴収される農地税は僅かな金額であり、したがって農地税とはほとんど名目税としての役割しか果たしていない。なぜなら、実際の徴収総額の合計は最高でもRs. 20,000であり、これに対して、VAOとTalayariの給与だけでも15万ルピーほど要するからである²²。

表3 VAOによる農地税への課税(年間)

課税の種類	徴税単位	徴税額
水田(nañcai)	1ヘクタール	Rs 33.95
畑(puñcai)	1ヘクタール	Rs 24.95
畑(puñcai with tank irrigation)	1ヘクタール	Rs 84.9

(出所) 藤田・佐藤[2009]

(注) 単位のRsはルピー

²¹ 現在のタミルナードゥおよび近隣州の一部を含む地域をさす。

²² 二人分の給与は、毎月 Rs. 13,000 × 12ヶ月 = Rs. 156,000 で試算(藤田・佐藤[2009]参照)。

地方税は、グラム・パンチャヤートのクラーク（書記官）が徴税村に含まれる自然村から、家屋税、水道税を、そして、小中学校教師、郵便局員、VAO、*Talayari*など村で勤務する公務員から専門職税を、それぞれ徴収する（表4参照）。2009年に筆者らがソーダルパッティ行政村で行った調査では、実際に各戸から徴収されていたのは家屋税²³だけで、水道税は未徴収であった（水道が全戸に普及していない、という理由による）。また専門職税は、合計でも20人程であった。

ここで、グラム・パンチャヤートの年間収支をみると、必要額は約30万ルピーであることがわかる（表4参照）。その際、歳入の3分の1は地方税（＝村税）によるが、残りの3分の2はパンチャヤート・ユニオンからの補助金である。つまり、地方税を全居住世帯から徴収したとしても、必要額の3分の1程度にしかならず、結局は州政府からの補助金によって地方自治制度が成り立っていると言える。

表4 グラム・パンチャヤートによる収入構造と徴税の種類（年間）

（単位のRsはルピー）

1. 収入総額	約 Rs. 300,000
村税	Rs. 100,000 (内訳: 家屋税40%、水道税50%、専門職税10%)
交付金	Rs. 200,000
2. 支出総額	約 Rs. 300,000
職員給与*1	Rs. 100,000 (内訳: 書記、副書記、道路清掃人、村長・議員【9人】)
その他	Rs. 200,000 (電気代、街灯バルブ、水道パイプ、水道施設維持費用など)

（出所）藤田・佐藤[2009]

（注）*1 職員給与の詳細は以下のとおり。書記(Clerk) Rs.1,344 × 12 = Rs 16,128、副書記(Assistant Clerk) Rs 1,200 × 12 = Rs 14,400、道路清掃人(7人) Rs 600 × 12 × 7 = Rs 50,400、村長・議員(9名)総額約 Rs 15,000、である。

次に、自然村の評議会の管轄下に位置づけられた私的な徴税組織であるタンダマイにつき述べる。Wade[1988]によると、アンドラ・プラデーシュ州でも同種の存在が確認されており、テルグ語ではマゲマイと呼ばれる。タンダマイは、村内で行われる販売などの取引に対し、売買者の双方から販売税を徴収するもので、それによる税収は、評議会が管理する会計（コモン・ファンド²⁴）の収入源のひとつに組み込まれている。

徴税の対象は、各種農産物や家畜などだが、税率を計算すると、粗収入の0.2～1%程度である。それらのうち金額の大きいものには、綿花、材木、メイズなどがある。徴税

²³ 家の材質（土壁またはコンクリート壁）と構造（平屋または2階建て）により異なる税率が適用されている。

²⁴ タミル語でポットゥ・ニッティと言う。

人は全部で9人おり、年間の総収入額は、Rs. 30,000~40,000となっている。徴税額は村へ来た外部の者からよりも、内部の者から集める額の方が大きいようである(表5参照)。

徴税担当者は毎年11月中旬から12月中旬の間に開かれる、村の評議会の集会で決定される。その際に行われる競争入札で最も高額を提示した者が徴税権を競り落とす仕組みで、コモン・ファンドにはその時の落札価格が収入として計上されている²⁵。

表5 タンダマイによる徴税の種類と徴税額

(単位のRsはルピー)

村人への課税				村に来た商人への課税	
課税対象物	課税単位	徴税金額	課税対象者	徴税金額	
農産物	粳米	100g	Rs 5	自動車で来たら	Rs 5
	棉	100g	Rs 50	自転車であたら	Rs 2
	雑穀	100g	Rs 6	(頭に籠を乗せて) 徒歩であたら	Rs 1
	豆類*1	100g	Rs 6		
	メイズ	100g	Rs 8		
家畜	乳牛	1頭	Rs 10		
	ヤギ	1頭	Rs 3		
その他*2	牛糞	カート1回	Rs 50		
	灌木	Rs. 100毎	2 paisa (=Rs. 0.2)		

(出所) 藤田・佐藤[2009]

(注) *1豆類には、レッド・グラム、ブラック・グラム、グリーン・グラムなどが含まれる。

*2その他には、公用地に植えてあるタマリンドの木から落ちた実を拾い集めて売った場合、などもある。

次に、コモン・ファンドについては、村の評議会が用途を決める権限を持っており、実際の管理は評議会のカウンスル・メンバーに託されている。

コモン・ファンドの収入源は、1. タンダマイによる売り上げ、2. 村の共有財産の売却による売り上げ(例:溜池の堤防地からプロソフィスと呼ばれる灌木を伐採し、その売り上げによる収入) 3. 村の共有財産の利用による売り上げ(例:ウーラニと呼ばれる村の池で行う養魚事業による収入や、村の結婚式場の利用による収入) 4. 村の規則違反者からの罰金の計上、5. 出稼ぎ者や離村者からの送金、等がある。次に支出先は、1. 村祭りの開催費用、2. 天水畑の見回りをする警備人の雇用費用²⁶、3. 村のインフラの維持費用(ヒンズー寺院や祠の電球取替え代や掃除代など)、4. 村の貧困世帯への貸付²⁷、などである(表6参照)。

²⁵ それ以外の収入は、各徴税担当者が自分の懐に入れることが出来る。ちなみに、徴税担当者には合議体のカウンスル・メンバーの者になることも多い。

²⁶ 水田の警備人(タミル語でチョコキダール)は別におり、溜池を共有する複数の(行政または自然)村の地主・所有者(タミル語でパッタダール)で形成される水利組合で雇われている。

²⁷ 個別の世帯にコモン・ファンドから直接貸し付けを行うものだが、返済不良により頓挫するケースが多く報告されている。

表6 コモン・ファンドの収入源と支出先(年間)

(単位のRsはルピー)

1. 収入総額 (Rs. 200,000-300,000)	
a.	マゲマイによる売り上げ(例 Rs. 30,000-40,000)
b.	村の共有財産の売却による売り上げ * 1
c.	村の共有財産の利用による売り上げ * 2
d.	村の規則違反者からの罰金
e.	出稼ぎ・離村者からの寄附(例:Rs. 100,000)
2. 支出総額 (Rs. 200,000-300,000)	
a.	祭りの開催(例:Rs. 200,000-300,000)
b.	天水畑の警備人の雇用
c.	ヒンズー寺院の電灯代・掃除代
d.	村人への小額の貸付

(出所) 藤田・佐藤[2009]

(注) * 1 河川や溜池の堤防など村の共有地での灌木(プロソフィス)の伐採など。
* 2 カースト・パンチャヤートで農地を購入、小作に出して、さらに利益を得る等。

コモン・ファンドの年間収支は地域差もあり千差万別だが、村祭りの開催費用²⁸にその半分ほどが使われ、残りは、前述の各種開発プログラムの実施に付随する費用²⁹にあてがわれているようである。

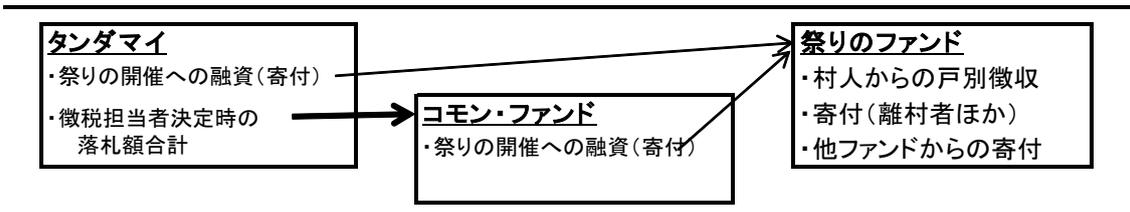
ここで、自然村にある各ファンドの関係を整理しておく。図 2 によると、タンダマイ、コモン・ファンド、祭りのファンド、が独立して個別に存在し、相互に資金の融通が行われている。そして、タンダマイからコモン・ファンドへの収入、すなわちタンダマイの徴税担当者決定時の落札額の計上以外については、タンダマイとコモン・ファンドからそれぞれ祭りのファンドへと、祭りの開催費用を補うべく損失補てんがなされているのである。

祭りの開催にはそれだけ多額の費用がかかるということだが、複数のファンドが個別に存在し、祭りの開催を側面支援しているとも言える。

²⁸ 村祭りは村によっては毎年～数年に一度開催されており(本稿表 8 参照)、1回の開催費用は2009年の調査時点ではおおよそ10万ルピーから15万ルピー程度であるが、2012年に同じ村で聞いた所、最近では25万から30万ルピーかかる、とのこと。

²⁹ 例えば、政府の下級役人が開発プロジェクトの説明などで村を訪れた際に、もてなすためのチャイ(お茶)の代金やわいろなど。

図2 自然村にあるファンドの種類と相互融資



(出所) 筆者作成

6. まとめ

インドにおける地方行政システムは、1992年の憲法改正以降は、それまで中層から上層カーストが主導権を握ってきたカースト・パンチャヤートによる治安や秩序の維持および村落活動を弱体化させ、グラム・パンチャヤートを通じて選挙の監視や開発プロジェクトを行うことで、末端の村落にまで政府の意図を浸透しやすくしてきた。しかし地方税の徴収システムが不十分で財政基盤が弱く、補助金なしでは成立しない。一方、公的な存在としてのグラム・パンチャヤートにその機能の一部がとって代わられたはずのカースト・パンチャヤートは温存されており、かつ、タンダマイに見られるような独自の徴税システムも備え、高額な費用のかかる祭りも自ら行っている。したがって、インド農村部における組織体を考察する際は、グラム・パンチャヤートだけではなくカースト・パンチャヤートのもつ、組織的な機動力と集合行為を可能にする資金調達力を見逃してはならないのである。

1992年の改正憲法施行後は、農村開発プログラムが策定される際はグラム・パンチャヤートが窓口となったが、それ以前は、村を代表するカーストのナッタマイやカライカランが、コンタクト・ポイントとなっていたはずである。このことは、シングル・カースト村では多数派のカーストに有利に、少数派のカーストには不利に働いたであろう。つまり1990年代中盤以後に村に導入された開発プログラムは、それ以前のプログラムに比べると、カースト・パンチャヤートによる恣意性を排除でき、かつ、より客観的な立場から、プロジェクトの導入を行えるようになった、と言えるのではないか。したがって、1990年代中盤以後に村に導入された開発プロジェクトの導入事例を収集し、その上で、カースト・パンチャヤートの果たした役割を精査することが、今後本研究を進める上で肝要となってくる。

ところで村祭りは、カースト・パンチャヤートによる複数のファンドや寄付を募って多大なコストをかけて行われており、農村部における重要な共同行為である。したがって、村祭りがどのように行われているかを分析することは、タミル農村で伝統的にみられる組織形成の理解に繋がる。その上で、近年(1990年代中盤以降に)導入された各種の開発プロジェクトと照らし合わせてみれば、農村住民にとって最も望ましい組み合わせでの組織

化への形成条件が明らかにされよう。

次節では、本稿の調査方法と調査地域について、地理や居住カーストに言及して、村祭りやマイクロクレジット活動などの集合行為の概略を明らかにする。

第2節 調査方法および調査地域の特性

1. 調査方法

調査地は、タミルナードゥ州マドライ県の北部と南部に散らばる農村8か所である（図3参照）。調査は複数回行った。

時系列には、2009年1月に県南部の1行政村に含まれる複数の自然村で、また2011年11月に県北部の7つの行政村または自然村と県南部の1つの自然村で、それぞれ集中的な村落調査を行い、2012年1月には情報確認のため数カ村を訪れた。うち2009年の調査は、京都大学東南アジア研究所の藤田幸一教授によるリードですすめられたが³⁰、調査地は筆者が2007年から現在まで数回ヒアリングを行ってきたソーダルパッティ行政村である。2011年の調査では、SHGプロジェクトが行われている村を選び、SHGグループのリーダーを対象者として、調査票を用いた個別聞き取りを実施した。県北部では、SHG活動を導入し助言を行ってきたNGOの方2名に案内役として村を選んでもらい、調査をアシストとして頂いたが、県南部では筆者ひとりで聞き取りを行った。

聞き取りの内容は、村の位置、行政名、歴史、居住者（カーストごとの世帯数や職業・学歴）の状況、インフラを含む共有資産や資源の有無、集団行動の有無（自治組織の有無、祭りの実施状況と開催頻度、マイクロ・ファイナンスによるグループ活動など）である。また、一部センサス³¹などの公的な情報も活用した。

2. 調査地域の地理と農村から都市への離村の現状

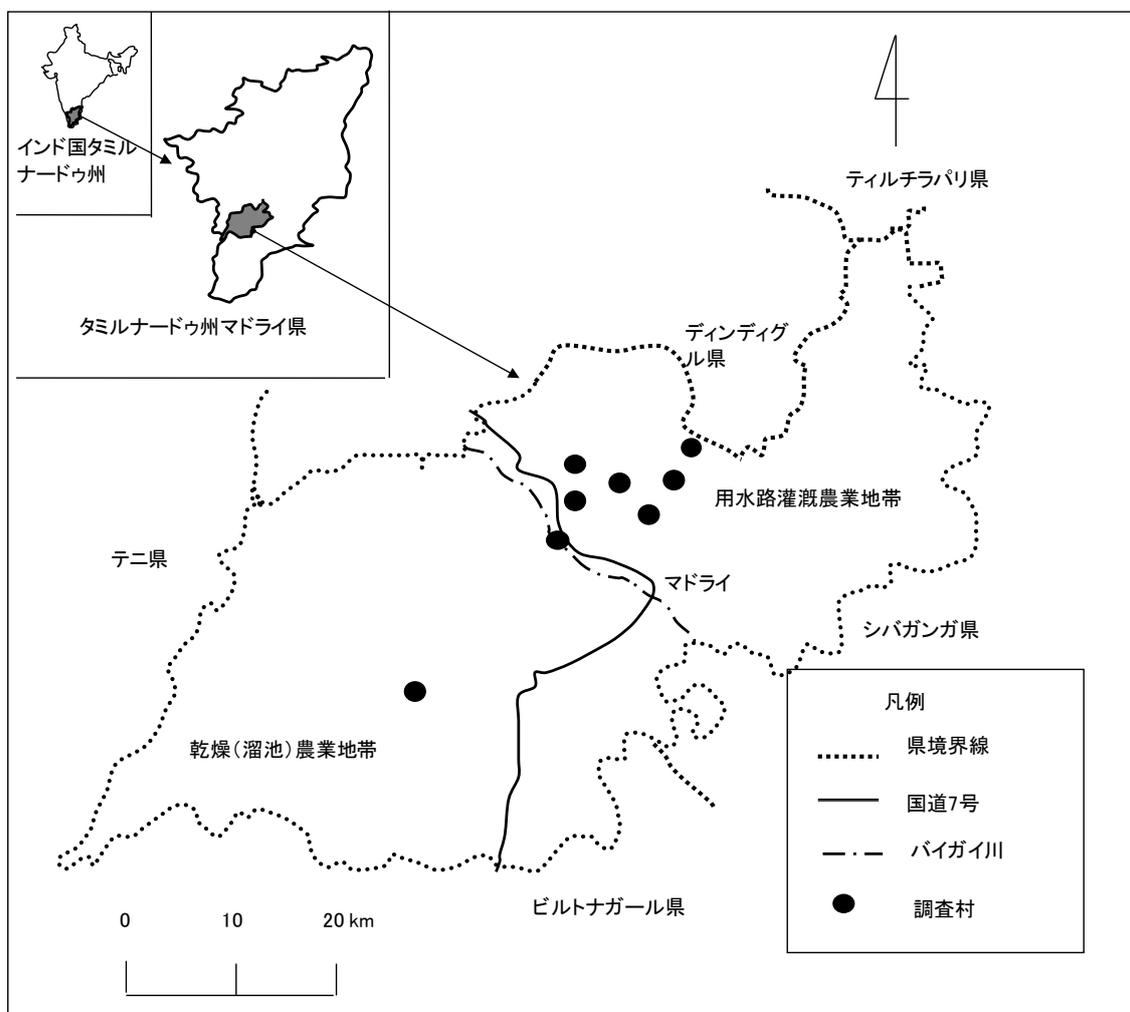
マドライ県は、年間降水量が800ミリ～900ミリ前後の半乾燥地域である。県の中央部を西から東へと流れるバイガイ川を境に、北部は主にペリヤールダムからの運河を利用した水田での稲作やその他の換金作物の栽培を主体とする用水路灌漑農業地帯であり、南部は溜池からの灌漑水による稲作および天水畑での雑穀を主とする溜池農業地帯である。本稿の調査村に共通することは、マドライや周辺の町から10～20キロ前後離れており、い

³⁰ 調査結果は、京都大学東南アジア研究所・共同研究会「アジア農村社会構造の比較研究」（GCOEイニシアティブ1研究会と共催、2009年6月14日開催）で発表した。本稿は、その時の発表資料を使用した（佐藤・藤田[2009]参照）。

³¹ 10年に一度、インド全土で行われる国勢調査のこと。GOI[2001][2011]を参照。

ずれも幹線道路に面し、バス停や鉄道の駅も近くにあるため、都市部へのアクセスが良く通勤圏内にあることである。特に近年では、非農業職で得られる収入が農業職のそれと比べて高いことから、調査地域では非農業就業へ移行する農家が顕著に見られており (Sato[2011a])、そのため調査村でも村を離れて町に移った離村世帯が非常に多い。これまで都市部への離村は、上層の裕福なカーストから進んできたのであるが (Greenwood[1971]) (Yanagisawa[1996])、最近では下層カーストの者も村から姿を消し、村には農耕カーストのみが残っていることも多い。2011年センサス速報値によると、タミルナドゥ州全体の2001-2011年の平均人口増加率は、農村部6.5%、都市部27.2%であり、最近では、農村部から都市部への離村が加速状況にあることが示されている。

図3 調査地域図



(出所) 筆者作成

3. 調査地域の民族（居住カースト）

筆者の調査によると、各調査村（＝自然村）には概ね 100 世帯未満～400 世帯がおり³²、ヒンズー・カースト³³を主体とする複数のカーストが居住している（表 7 参照）。各カーストは後述のいずれかの行政区分に括られるが、これは留保制度とも関係している。すなわち、公立大学への進学や公務員職に応募する際に、カーストの行政区分により募集枠や採用条件が異なっており、特に行政区分でSCやSTとされた下層のカースト（かつてのアウトカースト）ほど有利な条件で進学・就職できる、というものである³⁴。この制度は現在ひろくインド全土で採用されているが、もとはと言えば、20 世紀初頭にみられたバラモン等の少数の上層カーストによる公務員就業者や大学入学者の独占（特にタミルナードゥでは約 9 割を占めていた等）に対する批判・反省が発端となっている。つまり、従来のカースト秩序が身分制階層社会を構成してきた事に対する下剋上を目論んだ政策なのである。

表 7 によると、まず、上層カーストのアイヤール（祭祀を行う、バラモンまたはブラーミン）とピッライ（南インドでベラーラと呼ばれる地主層）は、先進カースト（Forward Caste, FC と略）である。

次に農民や耕作カーストの、カラール、コナール、ガウンダに加えて、北のアンドラ・プラデーシュから南下してきたレディヤールとナイドゥ、商業カーストのチェティヤールも、後進カースト（Backward Caste, BC と略）である。とは言え、現在は村落の支配層となっているカーストも多い。

そして、サービス・カーストと称される職業カーストであるヴァラヤール（耕作）、ワッナール（洗濯）、アムパッタール（床屋）、パニッカル（農業労働）は、最も後進なカースト（Most Backward Caste, MBC と略）とされる。彼らは元々カーストの最底辺に位置づけられ、土地を持たずに各々のカーストによる職種を行ってきたが、現在は留保制度の恩恵をさほど受けられないことから³⁵、後述のSCやSTよりも経済的に貧困者が多く見られる³⁶。

最後に、かつてカーストの枠に入れずアウトカーストとされて農業労働などを行ってきたパラール、パライヤール、サキリヤールは、指定カースト（Scheduled Caste, SC）

³² Town 格のものを除く。

³³ カーストとは、より厳密にはジャーティと呼ばれる共食・内婚による生活規範に基づく職能集団のことである。呼び名も地域や州によりやや異なるが、ここではマドライ県での呼称を使用した（表 7 参照）。

³⁴ 例えば州立のタミルナードゥ農業大学では、留保制度に基づき入学基準がカーストの行政区分にそって、次のように異なる。FC カースト＝60 点以上、BC カースト＝55 点以上、MBC カースト＝50 点以上、SC や ST カースト＝合格点以上（TNAU [2010]参照）。

³⁵ 押川[1990]参照。

³⁶ 後述のカバヌール村を参照（本稿第 3 節 1. ②）。

と呼ばれる。しかし、留保制度により最近では都市部などで多くの者が経済的に成功をおさめている。村にもそうした成功者による寄付を通じて、経済的な恩恵がトリックル・ダウンされている。大学進学者も多い。

ST (=指定部族) やムスリム、クリスチャンは、すでに離村しいずれの調査村にも全く残っておらず、そのため本稿では言及しない。

表7 調査地域で見られるカースト別の農業の形態

カースト名	英語名	カーストによる伝統的職種	行政区分	現在の農業職			その他*3
				地主	耕作	農業労働	
アイヤール	Iyer	地主・僧職	FC	●			
ピッライ*1	Pillai	地主・富農		●	●	●	
レディヤール	Reddiyar	耕作	BC	●	●	●	
ナイドゥ	Naydu	耕作		●	●	●	
カラール	Kallar	農民・家畜泥棒		●	●	●	
コナール	Konar	農民・牛飼い		●	●	●	
ガウンダ	Gounder	農民・羊飼い		●	●	●	
チェティヤール	Chetiyar	商人					●
ヴァラヤール	Vallyar	農民・耕作	MBC	●	●	●	
アサリ	Asari	大工・金属細工					●
ワンナール	Vannar	洗濯屋					●
アムパッタール	Ambattar	床屋・助産婦					●
パニッカル	Panikkar	農業労働				●	
パラール*2	Pallar	農業労働など*		●	●		
パライヤン	Paraiyar	農業労働・動物処理	SC			●	
サキリヤール	Sakkiliyar	農業労働・皮革なめし				●	

(出所) 2011年、2012年の筆者フィールドワークによる。

(注) *1 ベラーラ、ピラマーも含む。 *2 なかには、溜池の水門開け閉め全般を担う者（ニールパッティと呼ばれる）もいる。 *3 カーストによる職業に従事している場合など。FC=Forward Caste, BC=Backward Caste, MBC=Most Backward Caste, SC=Scheduled Caste。カーストの伝統的職業については、中村[1984]、柳沢[1995]、水島[1995]、Betteille[2011]を参考にした。

4. 調査地域の農村部で見られる集合行動

(1) 村の共有資源

村には、生活インフラとして次の共有資源が備わっている。ヒンズー教の神を祭った寺院や祠、舗装した小道、農業用の溜池（タミル語でカンマイ）、生活用水用の池（タミル語でウーラニ）、共有管理地、公衆便所、学校や郵便局、保健センター、PDS¹² ショップ、（村の祭りで使う）舞台、雑貨店（兼チャイ屋）、結婚式場などで、1970年代以降の政府の開発プログラムによって設立されたものが多く含まれている。

(2) 伝統的な集団行動としての祭り

表8は、タミルナードゥ州での祭りの一覧である。ヒンズー教や農業の祭りが多い。な

かでも、マドライ県における1月中旬のポンガル³⁷祭り（米の収穫感謝祭）は、地域によっては *Jallikattu*³⁸ と呼ばれる牛追い競技を伴って行われて、そのため *Jallikattu* を主催するカースト³⁹ は村のレベルを超えて開催地域一帯で、祭りに向けて結束して行動を起こす⁴⁰。その一方で、主催カーストと同じ村に居住する他のカーストは、*Jallikattu* を主催するカーストからの要請を受けて、村の同一カースト世帯から参加費を徴収し、祭りの開催を側面支援する。その際、費用の徴収はナッタマイが行う。ちなみに *Jallikattu* では競技の開催に先立って、寺で祈祷を受け化粧を施された牛が観衆の大歓声の中アリーナを進む。このように *Jallikattu* 競技はヒンズー教の儀式的な色彩を多少とも含む格好で行われている。

それ以外にも、10月から11月にかけて行われる祭りに向けて村の女性数人が数週間前から集まって貯金をし、祭りの当日はそれまでに集めた貯金で菓子を作りメンバー全員に配布する習慣もあったようである（現在はその習慣は廃れている）。ほかにも、このように地域がらみで開催される祭りでは開催委員会が組織され、それぞれのカーストを代表する者が委員会に名を連ねて、祭りの開催にむけて協調して行動をおこす。

開催される村祭りは地域によってやや異なるが、調査地域では次のいずれかである。2012年では、1月14日～17日のポンガル（米の収穫感謝祭）、1月28日のヴァサント・パンチャーミー（学問・芸術の女神への祈祷）、2月20日のマハ・シバラートリー（創造と破壊の神であるシバ神への徹夜の祈祷）、4月13日のヴァルシャ・ピラップ（タミル歴

³⁷ タミルナードゥ以外の地域（カルナタカ州など）ではマカラ・サンクランティーと呼ばれる。

³⁸ 英語で "bull taming" と訳される。毎年1月中旬から3～4日間行われるポンガル祭り中に（タミルナードゥにおける収穫祭で1日目は収穫への感謝、2日目は牛への感謝、3日目は場所によっては *Jallikattu* を行う）マドライ県や近隣の近郊農村で行われており、それぞれ数千人の観客が集まって、州内各地から集められた雄牛と闘牛士 (fighter) の健闘を見守る。もともとタミル地方では、古代から勇者の間で、牛の角にコインをぶらさげそれを奪う慣習があったようだ。近代になると各地のザミンダールの所領で強い牛を育てて、牛の角に衣服をつけてそれを勇者に競わせて奪う競技となっていった (Superintendent of Government Printing Calcutta[1908])。現在は、牛の背中に体当たりして抱きつき、そのまま牛がジャンプする間に闘牛士が一人だけしがみつことが出来たら勝者となり、自転車、アルマリ、扇風機、ステンレス製なべ、または金貨、のいずれかが賞品として観衆の目前で渡される（もし牛が数十人いる闘牛士たちから逃げることが出来たら、牛のオーナーが代わりに賞品を受け取る）。はるかインダス文明を支えたのはドラヴィダ人だという説があるが、モヘンジョダロの遺跡にも闘牛士の証拠がみついている (The Hindu[2012])。

³⁹ 管見の限りでは、*Valayar* や *Kallar* カーストに多い。

⁴⁰ マドライ県北部のアランガヌールに近いパラメドゥ村では、*Jallikattu* 祭りのための委員会（名称：マハリンガサミ・グラマ・ポドゥ・マダン）が1972年に設立され、以来今日まで続いている。その際、11人のメンバーは異なるカーストから構成される、とのこと (The Hindu[2012])。

による1月1日、お正月)、4月中旬から5月中旬のムッターランマン(天然痘の神への祈禱)、7月24日のナーグ・パンチャミー(蛇神への祈禱)、10月16日～23日の間のナバラートリー(ヒンズー教の神の人形をひな壇に飾る)と10月21日のパールバティ・プージャ(ガネーシャ神の母で良妻賢母の女神への祈禱)、である(表8参照)。なかでも、ポンガル、シバラートリー、ムッターランマンが多い。

表8 調査地域でみられるヒンズーの祭りの種類

祭りの名前	(アルファベット表記)	祭りの内容	時期 ⁽⁴⁾	村祭り ⁽⁶⁾
タイ・ポンガル ⁽¹⁾	Pongal	インドラ神(=雨をもたらす神)への収穫感謝	1月14日	●
マートウ・ポンガル	Mathu pongal	農業を手伝う牛への感謝	1月15日	●
ジャリカット	Jalikkattu	若者の勇気を試す闘牛の競技	1月16/17日	●
ヴァサント・パンチャミー	Vasant Panchami	サラスバティ女神(=学問・芸術の神)への感謝	1月28日	●
マハ・シバラートリー	Maha Shivaratri	シバ神(=破壊の神)への徹夜の祈禱	2月20日	●
ヴァルシヤ・ピラップ	Tamil New Year	タミル歴による1月1日、お正月	4月13日	
ムッターランマン	Mariammal	マリアンマン神(=天然痘の女神)への祈禱	4月中旬～5月中旬	●
ナーグ・パンチャミー	Nag Panchami	蛇神への祈禱	7月24日	●
クリシュナ・ジェイアンティ	Krishna Jayanthi	クリシュナ神(=宇宙を守護するビシュヌ神の変化)の誕生祝い	8月10日	
ヴィナーヤカ・チャットルティ	Ganesh Chaturthi	ガネーシャ神(=シバ神の息子)の誕生祝い	9月19日	
ナバラートリー・プージャ	Navaratri	ヒンズーの主要な神様を象った人形をひな壇にて祭る	10月16日-23日	
パールバティ・プージャ ⁽²⁾	Paruvathi puja	パールバティ女神(=良妻賢母でガネーシャ神の母)への祈禱	10月21日	●
ラクシュミ・プージャ	Lakshmi puja	ラクシュミ女神(=幸運と金運の神、吉祥天)への祈禱	10月29日	
ディヴァーラー ⁽³⁾	Deepvali	ラーマヤーナ物語のラーマ王子の帰還を祝う	11月13日	

(出所) 2011年、2012年の筆者フィールドワークによる。

(注) (1)ポンガル祭りは3～4日間続く。(2)ドゥルガー女神やカーリー女神と同一視される。(3)帰還を祝って(花)火を灯す。(4)太陰暦で開催日が決定される為、毎年の開催日が異なる。

(3) 近年形成された集団行動としての SHG

現在インド農村部では、貧困女性をターゲットとしたマイクロクレジット活動のうち、SHG⁴¹とよばれるグループ型貯蓄活動が最もさかんに行われている。

しかしSHGに先立ち、1970年代からインド全土で統合農村開発プログラム(IRDP)⁴²が施行された。これによりタミルナードゥ州では1980年代から主に個別農民を対象としたマイクロクレジット活動が普及した。一例では、子牛や役牛を飼育するための少額の融資を行い、半年間の返済期間は利子を1%に固定した。男子耕作者による講の形成などもみられたが、その後1990年代になると、SHGが普及すると共にIRDPの重要性は低下した。両者の違いは、IRDPがあくまでも個人融資に重点が置かれていたのに対し、SHGはグループ内での定期的な貯蓄の励行や資金需要のあるメンバーへの相互融資などの集団行動を伴っていた点である。

⁴¹ SHGとは、セルフ・ヘルプ・グループの略で、主に女性による10～15人を1グループとし、インドにあるマイクロクレジット活動の85%以上を占める。須田[2005]参照。

⁴² Integrated Rural Development Programの略。農村貧困層の融資制約の緩和が目的。

以下では、調査村における SHG 活動や祭りの開催に見られる協調行動の事例を逐次確認してゆく。

第3節 タミルナードゥ州マドライ県における広域調査について

1. 2011年の調査の概略

表9は、2011年11月下旬から2週間の調査で行った聞き取りの結果を、調査村ごとに比較したものである。以下は、表9の補足説明である。

まず各「行政村」は、それぞれ面積や含まれる村の数が異なるが、これは1992年の改正憲法施行後の数年内に申請されて当時のままであるか、またはその後申請を行って、GPの中の一自然村がGPとして新たに独立したかどうか、に拠る。もちろん後者の方が、各種の開発プログラムの恩恵をより享受できるので有利である。しかしそのためには、開発プログラムを導入・根付かせるのに要する財源を、村独自で調達する資金力が村人のなかにあることが前提となるようだ。これは、ほとんどの開発プロジェクトでは必要経費の3分の1程度が政府負担で、残りは村人による自助努力に任せられているためである。

表9 調査村の概要

番号	農村・都市の別	行政村の面積(ha)	行政村の人口(人)	行政村の就業者割合 ⁽¹⁾	カーストによる村の性格	カースト・パンチャヤート	祭りの開催頻度	カースト別のSHGの形成	村の特徴
①	農村	326	614	30%	シングル	有(バラヤール)	5-7年に1回	耕作カーストのみ	97%バラヤール(耕作カースト)。
②	農村	132	1062	44%	マルチ	有(カラール)	10年に1回	SCと他カーストは別	3割の地主カーストと7割の農業労働(SC)カースト。後者は祭りに参加出来ない。
③	農村	85	998	35%	シングル	無(バラール、停止)	なし	SCのみ	ほぼ農業労働(SC)カーストのみ。非農業就業傾向が強い。
④	都市	342	8622	不明	マルチ	不明	毎年	(カースト別:不明)	農業労働(SC)カーストの経済上昇の傾向が顕著。毎年祭りを開催。
⑤	農村	213	377	62%	マルチ	有(マルチカースト)	2年に1回	一緒	富裕なナイドゥ主体。SCの経済上昇で、祭りを一緒に行う。SCの間でSHGさかん。
⑥	農村	534	3343	不明	マルチ	無(コナール、停止)	毎年	一緒	コナールで元ナッタマイ世帯が25年間GP長で絶大な権力。祭りを毎年開催。
⑦	都市	668	1496	不明	シングル	不明	毎年	(カースト別:不明)	灌漑水に恵まれた水田地帯の村にはバラヤールのみ残り、農業を行う。
⑧	農村	1677	3131	65%	シングル	有(バラヤール)	数年に1回	一緒	8割強バラヤール(耕作カースト)でカースト組織活動。他の少数カーストも追随。

(出所)2011年の筆者フィールドワークおよびGOI[2011]。

(注)1)人口に占める就業者の割合。

また、「村の特徴」は、地主カーストと農業労働カーストの割合に重点を置いて記述した。両者の違いは、耕作を行う農民で、農地を所有しているかどうかだけの違いによる。つまり農業労働者(世帯)であっても、農地を所有していれば「地主」として計算した。すると、現在「地主」である者の99.9%が、耕作と農業労働の両方を行っていることがわかった。このように農業労働に対する需要は高いものの、農業労働だけを行う者⁴³が減少

⁴³ かつてはファームサーバントとされた常雇いのパンナイヤールは、農業労働を伝統的職種とするカースト(表7参照)が担っていたが(柳沢[1995]参照)、現在はそのような形態で農業労働を行う者は、ほとんどいなくなりつつある。

し、地主であっても額に汗して耕作せねばならない状況にあることがわかる。

以下では、各調査村の具体事例につき、あくまでも概況のみを記す。データの分析は今後行う予定である。

調査データの内容は、調査村の行政上の名称（郡の名称、パンチャヤート・ユニオンの名称、グラム・パンチャヤートの名称）、村へのアクセス、インフラの有無（農地面積、教育機関や宗教機関の有無、バス停などの交通機関、電灯や舗装道路の有無）、カースト別の人口および就業状況（労働者の割合と職種）、村祭りの有無と開催頻度、カースト・パンチャヤートの有無と活動内容、（カースト別の）SHG 活動など、である。そして、祭りや SHG などの集合行為がうまく行っている所と、そうではない所を識別し、社会経済的な背景の違いを確認するのが目的である。

ちなみに、以下の記述で行政村または自然村の違いは、調査で得られたデータの違いによる。

2. 県北部の用水路灌漑地帯における農村調査

①カダブール行政村

カダブール行政村（グラム・パンチャヤート）は、北マドライ郡、西マドライ・パンチャヤート・ユニオン（PU）に属し、326 ヘクタールの村域には4つの自然村が含まれる。マドライからは18キロ離れたナットム・ロード沿いにあり、すぐ近くには民間のジュース工場が操業する。

カダブール村には水田が200 エーカー⁴⁴あるほか、ヒンズー教の寺院（2つ）、幼稚園、小学校（5年生まで）、雑貨店（3軒）、公共配給店、舞台、結婚式場、舗装道路、バス停、他にも、水道供給（1994年）や電灯（1989年）が設置されている。

GOI[2001]によると、労働者の割合は全住民の30%で他村より低く、うち年間6か月間以上仕事のある者は25%で非農業職に就いているが、残りの75%は年に6か月未満の期間に仕事をし、農業労働職に就いている。

居住カーストは、村の開祖のバラヤール100世帯と、農業労働のパラール4世帯の計104世帯で、いずれも農地を所有しており、耕作と農業労働の両方を行っている。現在も村で家屋税、水道税や祭りの参加費を払っているものの離村した世帯には、カラール（農民、2世帯）、ムスリム（4世帯）、クリスチャン（6世帯）がいる。

若い世代の就業傾向をみると、大まかには農業100人、非農業100人で、後者には、建設労働30人、服仕立て職人10人、雑貨店などのオーナー20人、雑貨店店員や食堂の給仕40人で、公務員2人や大卒者5人もいる。

⁴⁴ 1 エーカーは、約0.4ヘクタールである。

村祭りは4月中旬から5月中旬にかけて行われるマリアンマン祭が5～7年に1回の割合で行われているが、その際は開催費用に20万ルピーかかるため、住民（のうち婚姻世帯1組あたり）から1,000ルピー程を徴収して半額を賄い、残りは離村した村人（のうち、多額の寄付を行う7人の者）および全てバラヤールによるカースト・パンチャヤートのメンバーから喜捨を集めて、やりくりしている。

村の評議会は、村にあるカルプサミという名のヒンズー寺院が母体になっており、第1節で述べた内容の活動を行っている。なかでも、村の結婚式用ホールを利用して結婚式を挙げた場合は、全部で3万ルピーの費用がかかるが、結婚式用ホールの利用料は村のCOMMON・ファンドにとっても良い収入源である。また天水畑の見回り人として村人から警備員⁴⁵を雇用しているが、その際の給料もCOMMON・ファンドから支給している。

一方で、外部機関が形成に関与した活動では、IRDIPによる農業ローンは100人程のバラヤール農民が受けており、融資対象は、子ヤギ、プラム（果実）の苗、農薬など各種の購入が目的となっている。その後、IRDIPがSGSY⁴⁶というグループ型マイクロ・ファイナンスに変化するのと時を同じくして、2000年頃には村でのIRDIPによる活動は解消した。2008年からは、村にアプローチしたNGOのすすめで、成人女性12人をひとまとまりとするSHG活動が開始されて、現在までに5グループが形成された。まだSHG-銀行ローン⁴⁷を受けるには至っていないものの、ほぼ全てのバラヤール世帯の者がSHGに加入しており、その際に受けた融資で子ヤギや子牛を購入した、との事である。

こうしたことから、カダブール村では村に唯一残っているバラヤール・カーストのみで村の農業を経営させており、村の協調活動も自らのカーストのみで行っていることがわかる。

②カバヌール自然村

カバヌール行政村（グラム・パンチャヤート）は、北マドライ郡、西マドライ・パンチャヤート・ユニオン（PU）に属し、132ヘクタールの村域には4つの自然村が含まれる。マドライから14キロ離れており、ナッタム・ロード沿いにある。

カバヌール自然村には、水田が100エーカー程あり、米（の小作）、雑穀、商業用の花の栽培などが行われている。また小規模だが、25エーカーの灌漑用溜池もあり、この溜池の灌漑水利用の調整を目的とした水利組合がある。カースト別のメンバー構成は、カラーールおよびガウンダーから各10人、パラール2人とパライヤール3人、である。

⁴⁵ 警備員には、代々同じ家の者が雇用される傾向があるようである。

⁴⁶ *Swarnjayanti Gram Swarozgar Yojana* の略。GOI[2009]参照。

⁴⁷ SHG活動が健全に行われていると監督者（NGOなど）が判断した場合、監督者の推薦で地方銀行などからSHGグループに対して銀行融資を受けることが出来る。融資金額は一括10万ルピーで、それをメンバー全員に均等配分し、毎月1%の利子をつけてグループとして返済する。期限内に完済されれば、政府がその半額をSHGに対して償還する。具体的な活動事例は、Fujita and Sato[2011]やSato[2011b]を参照。

村には、小・中学校（1～8年生）、舗装道路、電灯、水道、バス停、ヒンズー寺院や祠（6つ）、グラム・パンチャヤート・オフィス、1キロ先には郵便局と一通りのインフラが揃う。

GOI[2001]によると、カダブール行政村の労働者の人口比は44%で、うち半数が年間6か月以上仕事に就いており、非農業職に就く者の方が農業職より多い。その代わり、年間6か月未満の就業者の場合、ほとんどが農業労働者である。

ヒアリングによると、カバヌール村の開祖はガウンダーとその警護をしたというカラールの各4世帯で、50年前に30キロ離れたチェンナイ・ロード沿いのナラシンハパッティから移住してきた。現在のカースト別の世帯数（離村世帯も含む）は、カラール30世帯、ガウンダー30世帯、パニッカル80世帯、パラール10世帯、パライヤール10世帯、アサリ2世帯の計212世帯である。うち、地主は人口比では3割未満のカラールおよびガウンダーが8割方を占め、残りの2割はSCと呼ばれる農業労働カーストのパラールおよびパライヤールで、人口比は1割未満である。同じ農業労働カーストでも行政区分上MBCとされ人口比で4割未満のパニッカル・カーストの場合は、農地を所有する者がほとんどおらず、経済浮上の波に乗れていないことがわかる。

今も村で尊敬されているカーストは、ガウンダー（村の開祖）、カラール（村の開祖の警護役）、ナイドゥ（都市に出て成功している）の順である。ナイドゥは居住世帯にカウントされないほど少数世帯ながら、離村した今でも村において何らかの影響力を保持していることから、村の生活が都市へと離村して行った者との何らかの繋がりの上に成立していることが示唆される。

次に村祭りについて。今では10年に1回程度、SCカーストを除くカラール、ガウンダー、パニッカル、アサリの各カーストの者たちの間で行われている。村祭りでは、以前アウトカーストと呼ばれていたSCカーストの者が、今も排除されるケースが散見される。村には6つのヒンズー寺院または祠があるが、すべてカースト別に所有⁴⁸されている。また、カバヌール村から1キロ先のカンチャラムペッタ村にて、毎年カラールが主催する*Jallikattu*競技が、小規模ながら行われている。これはカバヌール村および近隣に居住する50人のカラールの者で組織され、祭りの開催費用の15万ルピーのうち、10万ルピーはカラールが集め、残りの5万ルピーは他カーストの者によびかけて募金を集めている。

次に2009年7月以降に活動を開始したSHGについて。現在までに各12人の定員で3つのSHGが形成されたが、そのメンバー構成はカースト別になっている。うち2つは、カラール、ガウンダー、アサリの者が加入するが、1つは全てパライヤールの者のみである。ちなみに、各SHGグループにはヒンズー教の神の名前が冠されている。

⁴⁸ 寺の名前（および所有カースト名）は、ムニヤサミおよびムッタランマル（カラールおよびガウンダー）、ソナイスワミー（パニッカル）、パッタラシスワミーおよびナンティーコイル（パラールおよびパニッカル）、がある。

こうした事から、カバヌール村では、SC カーストの者が伝統的な祭りとは異なる形成された SHG 活動においても、他カーストと一緒に集合行動に参加することからは排除されている。しかし、土地所有者も少なからずおり、また SC カーストの者だけで SHG グループなどの集合行為を形成するなどして、独自に経済的な上昇の途を模索している、と言える。

③ペッチクーラム自然村

ペッチクーラム行政村は、北マドライ郡、西マドライ・パンチャヤート・ユニオン (PU) に属し、85 ヘクタールの村域には、ペッチクーラム村を含む4つの自然村が含まれる。マドライからは8キロ離れており、隣はかつてイナム村⁴⁹であったティルパティ行政村だが、そこををささんでナッターム・ロードにアクセスできる場所にある。

さしたる情報は得られなかったのだが、ペッチクーラム行政村には、舗装道路、電灯、ヒンズー教の寺(4つ)、学校などがあり、パラールやパライヤールなど SC カーストが人口比で4割を占めており、他村に比べて高い割合である。

ペッチクーラム村のカースト別の居住世帯は、ベラーラ1世帯、アサリ1世帯、パラール30世帯で、パラールに限って言うと、うち60人が水田で小作、40人が建設労働を行っており、他に大学生が5人いる。若い世代では農業よりも、進学による非農業職就業をめざす傾向が強い。

GOI[2001]によると、全住民のうち労働者は35%で、うち年間6か月間以上仕事をしている者は51%である。そのほとんどが非農業職であるが、一方、6か月未満仕事をしている者は、ほぼ農業労働者である。農地はティルパティ行政村に住む25人のコナール・カーストの者が所有しており、全部で500エーカーある。また地元で著名な私立の進学校(マトリキュレーション・スクール)もそこにある。

5年に一度の選挙で選出されるグラム・パンチャヤートのプレジデントは、カラール、副プレジデントはパラールで、その他の委員には、カラール、アサリ、パラールの者がいる。

ペッチクーラム自然村では、祭りはSC内の喧嘩により行われていない。

SHGは2007年6月に1グループが形成されたが、これまでもSHG-銀行融資ローン⁴⁴は受けていない。メンバー構成をみると、27~45才のパラール女性12名だが、大卒1人と高卒が4人もおり、性差に関係なく明らかに高学歴化の傾向がみられる。

こうした事から、SCカーストの中でも特にパラールは、差別による社会経済条件のきつい、地主の下での肉体労働しか選択肢のない農村を離れて、留保制度による優先的な進学や公務員への就業機会のある都会へ出て、非農業就業の機会を積極的に捉えながら経済上昇の波に乗って行こうとする者が多い、と考えられる。

⁴⁹ 寺院領などの免税地。中村[1984]参照。

④サメイヤヌール町

サメイヤヌール町は、北マドライ郡、西マドライ・パンチャヤート・ユニオン (PU) に属し、342ヘクタールの村域には現在12,000人が居住する⁵⁰。マドライからは国道49号線上にあり、付近には鉄道の駅もある。

村ではないがSHG活動があり、マルチ・カーストが共存している、という情報を得てヒアリングを行った。

同町には、基本的な生活インフラが整うが、ほぼ全てのカーストに1つずつヒンズー寺院があり、離村したと思われるブラーミンの寺やキリスト教会、そのほかにも、警察、灌漑用溜池、鉄道局の所有地などがある。

居住カーストは、耕作カーストであるコナール、ピラマー (ベラーラ)、セルビ、カラーと商業カーストのチェティヤール、技能カーストで金属加工のアサリ、それに農業労働カーストのパラールとパライヤールで、村の支配層である耕作カーストが人口の3割を占める。

土地所有者の割合をカースト別にみると、耕作カーストでは平均28%が農地所有者であるのに対し、農業労働カーストでは平均37%である。また公務員就業者のカースト別の割合も、農業労働カーストの方が高い傾向⁵¹がみられる。

祭りは2月下旬に行われるシバラートリーや、10月中旬のナバラートリーの最中に行われるパールバティ女神への祈祷⁵²が、それぞれ毎年と3年に一度開催されている。その際は、各カーストに取り纏めの者がおり、住民(のうち婚姻世帯1組あたり)から会費を集めて開催委員会に納める。

SHG活動については、農村開発系のNGOが2009年9月にSHGを導入後、現在までに5グループが形成されており、うち2つのSHGが銀行連結プログラムによる政府の融資を受けるに至った。

以上から、サメイヤヌール町では、SCカーストの者が経済上昇をとげており、それにより祭りへの参加と自らの存在感を示すことに成功した、と言える。

⑤バデュガパッティ行政村

バデュガパッティ行政村は、バディパッティ郡、東マドライ・パンチャヤート・ユニオン (PU) に属し、近年整備されたパラメドゥ・メイン・ロードをはさんで位置しており、マドライからは15キロ離れた所にある。

⁵⁰ GOI[2001]では、人口は8,622となっていて、人口が10年で1.5倍増加している。

⁵¹ 行政区分でSCとされる農業労働カーストは公務員就業や大学進学の際に留保制度により優遇されている為、当然の結果とも言える。

⁵² タミル語でプージャと言う。

213ヘクタールの村域には402人が居住するが、村には基本的な生活インフラが完備しており、小学校やバス停、グラム・パンチャヤートのオフィス、ヒンズー教の寺、舗装道路、電灯、貯水タンク（飲料水用）、水田などがある。

GOI[2001]によると、人口に占める労働者の割合は62%と高く（後述の⑧ソーダルパッティ行政村と同程度、ちなみに前述の①カダブール行政村は30%程度）、うち年間に6か月以上仕事をしている者の割合は97%で、その内訳は、耕作農業3割、農業労働5割、非農業職2割、である。

村の開祖は、マドライ県の南に位置するビルトナガール県から移ってきたアイヤール（＝ブラーミン）だが、同じくハイ・カーストに位置づけられるナイドゥが村の人口の過半数に迫る。全部で7つのカーストが同居しており、なかでもアイヤール30人、ナイドゥ200人、アサリ10人を除くと、残りは全て農業労働カースト（＝SC）で、パラール60人、サクリヤール45人、パライヤール55人で4割を占める。

特筆すべきは、数年前に開通した両側2車線で中央分離帯のある幹線道路で、村の敷地を貫通しており政府が高額で買い上げた為、所有者であったナイドゥは経済的に潤った。現在でも農地の所有者はナイドゥとパラールであり、ここでも農業労働カーストであるパラールの経済的な上昇が覗える。

ところで村ではシバラートリー祭りを2年に一度行う。その際は、祭りの開催委員会が立ち上がるが、開催費用は15万ルピーであり、開催委員会のメンバーは、ナイドゥ5人、パラール3人、サクリヤール3人、パラヤール3人となっている。世帯毎の徴収額もSCカーストとそれ以外のカーストでは異なっている。しかしながら、これまで見てきた村では、SCカーストの者は祭りへの参加自体があまり出来ていない事に鑑みると、この村では、SCカーストの者がやや割高の参加費（1婚姻世帯あたりRs. 500で、その他のカーストの参加費はRs. 300）を払って祭りに参加している。それだけ経済社会的な上昇を遂げていることの証左である、と言えるのではないだろうか。5年ごとに村の選挙で選出されるグラム・パンチャヤート・プレジデントの出身カーストをみても、現在はナイドゥだが以前の2人はパラールであった。

総じてこの村では、SCとして差別を受け集合行動から排除されてきたアウトカーストの者が、その中の1つであるパラール・カーストによる経済的な上昇を契機として、おそらく団結して発言力を強め、村の活動に参加する権利を勝ち取っている、という可能性も考えられる。これまでは上位カーストの土地所有者は村落の創始者であることを理由に、下位カースト成員が村落の未耕作地を占有し耕作者に転化することを防いできたが（水島[1995:104]）、最近では、下層カーストの経済状況の変化により、村の協調活動の質にも変化が生じている、と考えられる。

また5つあるSHG活動をみても、SCカーストであるパラールによるもの（3つ）、パライヤールによるもの（1つ）、大多数がSCとBCカーストの合同（1つ）となっており、

特にパラール・カーストによる率先的な SHG 形成への取り組みがみられる。

したがって本村では、永年、下層に位置づけられてきた SC カーストが土地を所有し経済上昇を続ける中で、村落活動の主体としても巻き込まれずにはいられないような経済社会構造の変化が生じているのではないかと考えられる。

⑥シー・ブドウ自然村

シッタラングディ行政村は、バディパッティ郡、西マドライ・パンチャヤート・ユニオンに属し、534ヘクタールの村域にはシー・ブドウ村を初めとする複数の自然村がある。国道44号線から数キロ内側に位置し、マドライからは17キロ離れている。

村には基本的な生活インフラが完備し、グラム・パンチャヤートのオフィスやヒンズー教の寺院、舗装道路、電灯があるほか、500エーカーの農地がある。

村の開祖は200年前に当地に移ってきたコナールだが、以来村の支配カーストであり続け、30年前まで200エーカーの農地を1世帯だけで所有していた。この家はその後、マドライにてホテル業を初めとするビジネスの幅広い分野で成功を収めている。またこの一家が所有していた農地は、その後、コナールおよびSCの世帯に分配された⁵³。

現在村に登録された世帯数は566世帯だが、なかには居住世帯数と離村世帯数が逆転しているカーストもある。表10によると、コナール、ナイドゥ、アサリで離村世帯の方が村の居住世帯よりも多い。一方で、村に残っている世帯の比率が高いのは、パラールやバーバーであるが、数の上では少ない。

表10 シーブドウ村におけるカースト別の在村世帯数および離村世帯数

カースト名	行政区分	村の登録世帯数	在村世帯数		離村世帯数	
			居住世帯数	(比率)	離村世帯数	(比率)
コナール	BC	200	50	25%	150	75%
ビラマー		200	100	50%	100	50%
ナイドゥ		130	30	23%	100	77%
アサリ	MBC	4	0	0%	4	100%
バーバー		2	1	50%	1	50%
パラール	SC	30	20	67%	10	33%
	合計	566	201	36%	365	64%

(出所)2011年の筆者フィールドワーク。

(注)行政区分は、表7を参照。

⁵³ コナールのみならず、SCカーストにも分配された背景には、*Bhoodan Moovement*の存在がある。それはアウトカーストとされていた人々に土地を再分配する運動である(GDRC[2010])。

祭りは年間に6回ほど行われており、そのための開催委員会がある。カースト別の委員数は、コナール4人、ビラマー3人、ナイドゥ1人、パラール1人で、各カーストの委員数の配分は表10の各カースト別の居住世帯数の比率と比べても一致していない。しかし村の登録世帯数を見ると、世帯数の多いコナールやビラマーに祭りの委員会の委員が多い。これは離村世帯であっても村に戻って祭りに参加することで、村との韌帯を残している証左である、と言える。

次にグラム・パンチャヤートのプレジデントについてみると、コナールの同じ家系から代わる代わる25年の間選出されている。元はナッターマイの家系だが、現在も100エーカーの農地を所有する。

SHG活動をみると、1990年代初頭以降4つのNGOが複数のSHGグループを形成しており、その際のメンバー構成も、カーストの別にかかわらず参加している。

したがってシー・ブドゥ村は、コナールの村の開祖の家系が今も強力な影響力を保持しており、それは祭りの頻繁な開催やグラム・パンチャヤート・プレジデントの選挙などの集合行動の際にも表れている、と考えてよい。そして、離村した世帯とも韌帯を維持する事にも成功している、と言えよう。

⑦サッタガウ町

メトゥパッティ町は、バディパッティ郡、西マドライ・パンチャヤート・ユニオン(PU)に属し、アラガヌールへと至る幹線道路を南下し8キロ進んだ所に最も近いショラバンドンの町があり8キロ離れているが、ちょうど国道7号線と直行しており、マドライまでは24キロの距離である。サッタガウ町はメトゥパッティ町を構成する町の一つである。

サッタガウ町は、西に位置するケララ州との州境に近いバイガイ・ダムから直接引水しているムライ・ペリヤール用水路沿いにあり、そのため農業用水には事欠かない。村も水田地帯に位置しており、周囲には水田が合計で700エーカーある。ムライ・ペリヤール水路のおかげで、本町は周囲よりも経済的に潤っている、と村人は言う。

町には、基本的な生活インフラが整っている。生活用舗装道路、電灯、水道、ヒンズー教の寺、舞台、農作物貯蔵庫、貯水飲料水タンク、結婚式場、VAO事務所などで、公立高校もある。

町の開祖はバラヤールで、200年前にブドゥコッタイから移ってきた。サッタガウ町の登録人口は、ヴァラヤール700人、サクリヤール70人だが、実際の居住人口は、バラヤール500人、サクリヤール20人で、やはりサービス・カーストであるサクリヤールの者たちの方が、離村傾向が強い。

ヒアリングによるサッタガウ町のカースト別の就業傾向は、バラヤールは農業耕作と農業労働の両方を行う者が多く、また大学生も30人いるのに対し、サクリヤールではほとんどが農業労働者である。このような土地所有を媒介とした経済状況の違いは、この村に

はバラヤールが地主，サクリヤールが農業労働，という慣習的な土地所有によるカースト別身分制階層構造が温存されている可能性が示唆される。

祭りは年に3回ほど行われており，うち最も盛大に行われるのは2月下旬のシバラートリーで，その際は住民（のうち婚姻世帯1組あたり）から200ルピーを徴収して開催される。

SHGについて。2008年以降，2つのNGOがそれぞれ複数のSHGグループを形成し，現在は各メンバーから月に100ルピーずつ徴収している，との事であった。

3. 県南部の溜池灌漑による乾燥農業地帯における調査

県南部の調査村は，2007年から2010年にかけて調査を行った，ティルマンガラム郡，ティルマンガラム・パンチャヤート・ユニオン，ソーダルパッティ行政村の中にあるシディレッディパッティ自然村の隣、バライヤパッティ自然村である。

ティルマンガラムにはかつて同名のザミンダールがあり，当時からVAOを使って地税の徴収金を集めて県徴税官であるコレクターに納税し，大英帝国によるインド支配に加担していた。この地域一帯は，カラール・カースト（表7参照）が多勢を占めていたが，現在も続く *Jallikattu* は，英領期から各地のザミンダールが競って育てた強い牛による競技であった（Superintendent of Government Printing Calcutta[1908]）。それが引き継がれて今でも当地の慣習として残っているものである。

⑧バライヤパッティ自然村

ソーダルパッティ行政村は，国道208号をさらに西のペライユール方面へと折れた先へ10キロ程行った所にある。マドライからは34キロの距離だが，ティルマンガラムからは14キロの所にある。ティルマンガラム町には20世紀初頭から織物工場があり，マドライ県の中でも早くから非農業セクターが発達した地域として知られる。

ソーダルパッティ行政村は2つの徴税村から成り，調査村であるバライヤパッティを含む全部で8つの自然村と集落（コロニー）がある。また同名の灌漑用溜池が雨期にのみ水が流れるグンダール川沿いであって，川の上流および下流側の溜池と繋がって（＝チェーン状溜池構造）灌漑地を潤すが，周囲一帯は圧倒的に天水畑が広がっており，農地面積の割合も，灌漑地：天水畑は1：13で，いわゆるドライ・ゾーンにある。前述の①～⑦の村がいわゆるウェット・ゾーンにあるのとは対照的である。

ソーダルパッティ行政村一帯の開祖はブラーミン（サブセクト名，アイヤール）だが，ティルマンガラム一帯で勢力を誇っていたカラール，マドライ県より北東に位置するタミルナードゥ州プドウコッタイヤラマナタブラムあたりから移ってきたチェティヤールやバラヤール，そしてアンドラ・プラデーシュ出身でテルグ語を話すレディヤールやナイドゥ

が、後に当地に集住するようになった⁵⁴。

ヒアリングによると、バライヤパッティ自然村には、ムパール（バラヤールのサブセクト名）が350世帯、サクリヤールが25世帯、パラールが50世帯住んでおり、つまり8割がムパールで、ムパール主体のシングル・カースト村ということになる。残りの2割の住民はSCカーストである。カースト別の就業動向は不明である。

バラヤール自然村では、ムパール主体のカースト・パンチャヤート（または村の評議会）が数年前まで存在し、その際はサクリヤールやパラールの者も、その決定に従わねばならなかった。この村では、やはり数年前まで *Jallikattu* が毎年開催されたが、負傷者が出るなどして、活動は現在停止している。

それ以外の祭りには、4月中旬から5月中旬にかけてのマリアンマン祭がこの村のみ単独で開催されている。20年以上前までは、ソーダルパッティ行政村の他の自然村との共催で祭りが行われていたのだが、カースト間の諍いが生じた為、以後は各村で個別に行われるようになった。

バライヤパッティ村におけるSHGの活動状況は、筆者が調査した隣村のシディレディパッティ村と全く同じであった。すなわち、1990年代初頭から乳牛の普及を目的とした貯蓄組合活動によるSHGが形成され、1990年代後半にはマドライを拠点とするNGOが計7つのSHGを形成したが、その後、SHGとしての活動は財政基盤のより強固なNGOによって引き継がれて現在に至る。それ以外にも州政府の農業局の傘下にある女性のための農村開発公社の主導でSHGが形成された（詳細は、Fujita and Sato[2011], Sato[2011b]を参照）。

第4節 まとめ

第3節のデータから明らかになった事は、シングル・カースト村とマルチ・カースト村を比較した場合、前者では、多数派のカースト・パンチャヤートがあると、多数派カーストへの恣意的な利益誘導が生じやすく、そのため少数派カーストは不利益を被りやすい。また、少数派カーストには農業労働者などの経済的弱者が多い。例えば、調査村①と⑧は、シングル・カースト村だが、多数派のカーストによるカースト・パンチャヤートがあり、少数派カーストは、意思決定には参加できないが、決定事項には従って暮らしている。一方、マルチ・カースト村の場合は、複数のカースト・パンチャヤートが存在し、そこでは少数派カーストや下層カーストによるカースト・パンチャヤートが、支配層カーストによるカースト・パンチャヤートから不利な条件をつきつけられたとしても、カースト・パンチャヤートにおける決定と独立性を通じて、村の評議会では多少なりとも交渉権を発揮するのである。調査村⑤や⑥は、その事例である。

⁵⁴ 詳しくは Sato [2011a][2011b]を参照。

1990年代中盤以降は、グラム・パンチャヤートを通じて各種の開発政策が末端の村へと届くようになり、それまで村落活動の主導権を握ってきたカースト・パンチャヤートによる恣意性や資源配分における決定権は、減少したはずである、と一般に思われている。しかし現在でも、カースト・パンチャヤートは村によっては強い独立性を保持して、祭りやSHGなどの集合行為の実施に、カーストを単位として具体的に関わっている。

今年度の調査では、本稿の課題であるカースト・パンチャヤートの存在と各種開発プロジェクトとの因果関係まで明らかにすることが出来なかったが、今後の調査では、次の課題を追求する。

- ・これまでに村に導入されてきた各種の開発プロジェクトは、カースト・パンチャヤートと接触を持って導入されたのか、またはされなかったのか。

- ・グラム・パンチャヤートが主体となって開発プロジェクトを導入する際は、カースト・パンチャヤートに働きかけを行って、何らかの支援を得てプロジェクトの導入をはかったのか、または、はからなかったのか。

今後の再調査で得られたデータは、今年度に得たデータと突き合わせて社会経済的な背景と照らし合わせて類型化を行ってゆきたい。

謝辞

本調査は、京都大学東南アジア研究所 GCOE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」2009年度フィールドステーション派遣、アジア経済研究所・平成23年度研究会（「アジア農村における地域社会の組織形成メカニズムに関する研究」）海外調査、京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」2011年度派遣、などの海外調査助成を受けて行われた。また2011年度の調査は、Mr.Tangamani, Trust for Rural Development、Dr.Gellnight, Director, Shalom Reform Mission、Mr. Rajasekaran, MSc Student, Tamil Nadu Agricultural University の協力を得て行われた。また、インドで本稿の執筆中にPCが故障した際は、京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科・田辺明生教授に代わりのPCをご出張時にオリッサの空港まで運んで頂ければ、本稿の作成は不可能であった。また、草稿にもコメントを頂いた。記して感謝したい。

参考文献

【日本語文献】

- 押川文子[1990]『社会変化と留保制度』, 押川文子編「インドの社会経済発展とカースト」, アジア経済研究所。
- 佐藤慶子[2008]「南インド半乾燥地帯における農村貧困層にとっての貧困削減手段としてのヤギ飼育の意義の研究: タミルナードゥ州マドライ近郊農村での定点観察から」, 京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科・魅力プログラム派遣報告書。
(http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/miryoku/j/pdf/report/sato_k_1.pdf)
- 須田敏彦[2006]「インド農村金融論」日本評論社。
- 中村尚司[1984]「共同体の経済構造(増補版):労働の蓄積と交換」新評論。
- 藤田幸一・佐藤慶子[2009]『集落レベルのカースト自治組織』, 京都大学東南アジア研究所・共同研究会「アジア農村社会構造の比較研究」(GCOE イニシアティブ 2 研究会と共催) 発表資料。
- 水島司[1995]『南インド乾地農村の変化と不可触民』柳沢悠編「カースト差別と被差別・第4巻・暮らしと経済」明石書店。
- 柳沢悠[1995]『南インド水田地帯農村の経済構造とカースト:十九~二十世紀』柳沢悠編「カースト差別と被差別・第4巻・暮らしと経済」明石書店。

【外国語文献】

- Ananth Pur, K: and Moore, M. [2007] “Rivalry or Synergy ? Formal and Informal Local Governance in Rural India,” *Development and Change*, Vol.38, No.3, pp.401-421.
- Beteille A. [2011] *The Andre Beteille Omnibus*, Oxford University Press.
- Fujita, K.; and Sato, K. [2011] “Self Help Groups and the Rural Financial Market in South India; A Case of a Tamil Nadu Village,” *Southeast Asian Studies* , Vol.49, No.1, pp. 74-92.
(<http://kyoto-seas.org/2011/11/southeast-asian-studies-vol-49-no-1-3/>)
- Global Development Research Centre (GDRC)[2010] *Credit Assessment – ASSEFA Way*.
(<http://www.gdrc.org/icm/assefa.html>.)
- GOI [2001] *Census of India 2001, Series 33 Tamil Nadu, District Census Handbook, Part-B Madurai District, Village and Town-wise Primary Census Abstract*, Government of India.
- GOI [2009] *Report of the Committee on Credit Related Issues under SGSY*. Department of Rural Development, Ministry of Rural Development, Government of India.
([http://www.nird.org.in/Prof_RadhakrishnaReporton SYSY30Apr2009.pdf](http://www.nird.org.in/Prof_RadhakrishnaReporton%20SYSY30Apr2009.pdf))
- GOI[2011] *Census of India 2011*. Provisional Population Totals, Paper 2, Volume 1 of 2011 Rural-Urban Distribution Tamil Nadu Series 34, Director of Census Operations Tamil Nadu, Government of India.

(http://www.censusindia.gov.in/2011-prov-results/paper2/data_files/tamilnadu/Tamil%20nadu_PPT2_volume1_2011.pdf.)

GOTN[2009] *Backward Classes, Most Backward Classes & Minorities*. Welfare Department.

(<http://www.tn.gov.in/departments/bmbc.html#web>.)

Greenwood, M.J. [1971] "An Analysis of the Determinants of Internal Labor Mobility in India," *The Annals of Regional Science*, Vol.5, No.1, pp. 137-151.

Sato, K. [2011a] "Employment Structure and Rural-Urban Migration in a Tamil Nadu Village:

Focusing on Differences by Economic Class," *Southeast Asian Studies*, Vol.49, No.1, pp. 22-51.

(<http://kyoto-seas.org/2011/11/southeast-asian-studies-vol-49-no-1-3/>)

Sato, K. [2011b] "Goat-Rearing Practices and the Limited Effects of the SHG Program in India: Evidence from a Tamil Nadu Villages," *Southeast Asian Studies*, Vol.49, No.1, pp. 52-73.

(<http://kyoto-seas.org/2011/11/southeast-asian-studies-vol-49-no-1-3/>)

Superintendent of Government Printing Calcutta [1908] *Imperial Gazetteer of India: Provincial Series Madras II*.

Tanabe, A. [2005] "The System of Entitlements in Eighteenth-Century Khurda, Orissa:

Reconsidering 'Caste' and 'community' in Late Pre-Colonial India," *South Asia: Journal of South Asian Studies*, n.s., Vol. XXVIII, no. 3.

The Hindu [2012] "Jallikattu: tradition first, safety next" on The Hindu (Madurai version), a newspaper article issued on 15 January 2012.

TNAU homepage [2010] *Admission to Undergraduate Programs Information Brochure 2010-2011*. (<http://www.tnau.ac.in/ugadmi/ugbroch10.pdf>.)

Wade, R. [1988] *Village Republics: Economic condition for collective action in South India*, Cambridge: Cambridge University Press.

Yanagisawa, H.[1996] *A Century of Change: Caste and Irrigated Lands in Tamil Nadu 1860s-1970s*, Manohar.

付録：下層カーストによる集合行為としての祭りや SHG への参加状況について

ここでは、カーストの違いによる村祭りや SHG への集合行為への関わり方に言及しておきたい。なかでも、下層カーストとされ、祭りなどの集合行為に伝統的に排除されてきた SC カーストをとりあげる。

第3節でみてきたように、現在においても、農業労働カーストである SC カーストが、集合行為から排除されている事例がいくつか確認された(表9の①, ②, ③, ⑦, ⑧の村)。しかし昨今は留保制度による優遇政策を受けて、SC カーストが経済的に浮上する中、これまでは排除されてきた村の集合行為にも変化が見られている。そして、村によっては、積極的に関わっていかうとする SC の姿がみられる所も確認できた(④, ⑤, ⑥の村)。

では、どのような条件において、現在、SC カーストが集合行為への参加を成功させることが出来ているのか、確認を行う。

まず付録表1を見てほしい。各村において、SC カーストのおかれた経済社会的な条件(IとIIで示す)と、祭りや SHG などの集合行動との関係(IIIとIVで示す)から考察したものである。そこから、次に記す組み合わせが見出せる。

付録表1：村(町)別にみたSCカーストの経済社会状況と集合行動の関係

I	シングル・カースト村(町)	マルチ・カースト村(町)	III	シングル・カースト村(町)	マルチ・カースト村(町)
SCカースト少数派	①、③、⑧	⑦、⑥	SCカースト、祭りから排除	①、③、⑧	②、⑦
SCカースト多数派		②、④、⑤	SCカーストも一緒に祭り		④、⑤、⑥

II	シングル・カースト村(町)	マルチ・カースト村(町)	IV	シングル・カースト村(町)	マルチ・カースト村(町)
SCカースト経済的貧者	①、③、⑧	②、⑦	SCカーストだけのSHG	①、③	②
SCカースト経済的富裕		④、⑤、⑥	SCと他カーストが合同	⑧	⑤、⑥

(注)④と⑦はデータなし

(出所)筆者作成

(注)①～⑧は、調査村の番号(表9参照)。

- パターン1：少数派，経済的弱者，集合行為から排除（祭りと SHG）・・・①③⑦
- パターン2：少数派，経済的弱者，集合行為から排除（祭りのみ）SHG は自前・⑧
- パターン3：少数派，経済的富裕，集合行為を合同（祭りと SHG）・・・・・・⑥
- パターン4：多数派，経済的弱者，集合行為から排除（祭りのみ）SHG は自前・②
- パターン5：多数派，経済的富裕，集合行為を合同（祭と SHG）・・・・・・④⑤

ここから言える事は、経済的弱者の SC は、集合行為から排除されたままであるが、経済的富裕の SC は、少数派か多数派にかかわらず、集合行為に参入している、という事実である。つまり、経済的な力を身につけた村の構成員は、たとえアウトカーストとしてこれまで蔑まれてきた存在であっても、無視し続ける事はできないほどに、他の村落構成員が減少し、または比較的経済弱者に陥って、村落活動がこれまでのカースト成員だけでは成立しなくなっているか、それとも、経済的に浮上した SC カーストが、社会的な参加または認知を求めて強力に自己主張を行った結果、村落社会に根付いていた伝統的なカースト別身分制格差社会による差別的な価値基準を転覆させ、下層階層のカーストに対する人々の認識を再考させることに成功した、のいずれかが想定できる。

前述の通り、調査村はすべて都市部へのアクセスの良い場所にあり、離村が進む中、これまで経済的向上の機会がなかった下層カーストが、政府による優遇政策のおかげで安定した収入と職業を手にする機会を増加させることになった。それとほぼ同時に、これまで村の支配層であったカーストの者が次々と離村していく中で、今度は、村の支配層として農業を経営し、祭などの集合行為に参加して村落の秩序維持などの活動に乗り出したのが、経済的に浮上した SC カーストだった、ということができよう。